

事例 4

演劇や表現から 地域の生きにくさと向き合う 民間劇場・市民グループ

調査対象

【コーディネーター】

荒井洋文（一般社団法人シアター&アーツうえだ 代表／プロデューサー）

【関係者①：のきした】

伊藤茶色（犀の角 照明・制作スタッフ）、黒岩友香（NPO 法人リベルテ 副代表理事／roji 相談支援専門員、犀の庭・子ども部シマウマ）、清水洋幸（一般社団法人あそび心 BASE アフタフ・バーバン信州 理事長）、直井恵（特定非営利活動法人アイダオ／NPO 法人上田映劇 理事、うえだこどもシネマクラブ）、野川未央（特定非営利活動法人 APLA 事務局長）、八反田貴史（デイサービス Sora／管理者生活相談員）、武捨和貴（NPO 法人リベルテ 代表理事／スタジオライト・roji 管理者）、元島生（NPO 法人場作りネット 理事／やどかりハウス スタッフ）、よしざわまほ（犀の庭・しまうま子ども部、1135 ラジオ）

【関係者②：行政・サントミュージゼ】

掛川泰督（長野大学 学部学科再編室 室長／元・サントミュージゼ）、清水一郎（上田市政策企画部交流文化スポーツ課 文化振興担当係長）、谷口弘毅（上田市教育委員会事務局生涯学習・文化財課 主査）、横尾慎二（上田市交流文化芸術センター（サントミュージゼ） 演劇・ダンス企画制作）

事例調査から見てきたポイント

◎ 演劇や表現活動をとおして生きにくさと向き合う

- 演劇をとおして未知のものと出会うこと、自ら表現活動に取り組むことが、生きづらさからの救いや生きる力につながる。
- 地域に演劇を持ち込むことが、異なる価値観の共存する街をつくり、誰をも受け入れる地域へとつながっていく。

◎ 劇場という創造の場、空間が持つ力を活かす

- 劇場という創造の場や空間が持つ力は、地域の課題と向き合う市民グループ「のきした」の活動を生み出す大きな要因となっている。
- 地域をよりよくしたいという想いを支え、フットワーク軽く活動を立ち上げ、実行に移せるのは、民間の劇場という場の持つ力。

◎ 余白や隙間、決まり事がないところから生まれるもの

- 余白や隙間、決まり事がないところから生まれることを大切にしたい。

◎ 悩みを共有し、次のアクションをイメージしてつなげていく

- 支援する側と支援される側を分けることなく、悩みを共有しながら、皆で考え、お互いができないところを支え合うことで、社会は生きやすくなる。
- 課題と向き合い、こうなってほしい、こうなったらいいというイメージを持って、人や活動をつないでい

海野町商店街に立地する「犀の角」
撮影：太田拓実



くことで、具体的なアクションが生まれる。

◎ 地域社会が支える共有地としての民間劇場

- 民間の劇場は公立の文化施設にない自由度やポテンシャルを有している。
- それを従来の経済システムの中で運営していくのではなく、神社や寺社仏閣のように地域社会の共有地として皆で守り、維持していくことはできないか。
- 公的な補助金や助成金の矛盾（国や地方公共団体の基準や評価が優先され、本来の目的や狙いからずれてしまう恐れがあること）に自覚的でありたい。

1. コーディネーターとしての仕事や活動の内容

長野県上田市の中心、海野町商店街の中心に位置する「犀の角」は、一般社団法人シアター&アーツうえだが運営する民間の文化施設である。1階は劇場とカフェの複合施設、ほかに稽古場などに利用できるレンタルスペースやゲストハウスが併設されている。

犀の角の開設や一般社団の立ち上げで中心的役割を果たし、現在社団の代表として犀の角の運営責任者を務めているのが荒井洋文さんである。施設構成からもわかるように、荒井さんは犀の角を拠点に演劇を中核としつつ幅広い事業を展開し、地域や市民と向き合いながら多様な成果を生み出している。

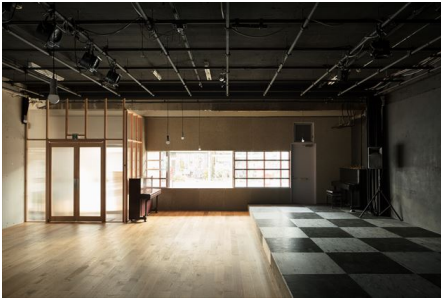
犀の角のHPには「自分の外側にあるものと出会う場所」「変な人でも住みやすい街に」というキーワードが掲載されている。それは、この施設や荒井さんの活動の狙い、市民と演劇との関係づくりや地域に対する眼差しを象徴している。

同じくHPには、「観る（上田街中演劇祭、主催公演）」「創る（稽古場として使えるスタジオ、アーティストインレジデンスなど）」「出会う／交流する（カフェやゲストハウスでのアーティストや地域住民、旅人などの出会い・交流）」「裾野を広げる（演劇への興味関心の喚起、さまざまな文化的イベントの開催）」という4つの事業や活動の方針が掲載されている。

ここでは、荒井さんのコーディネーターの仕事として、犀の角の運営や事業の基本的な構造を整理したうえで、地元の市民団体と共同で取り組む「のきした おふるまい」、「上田街中演劇祭」の二つを中心に、行政組織と取り組む事業も含め、荒井さんのコーディネーターとしての業務内容を整理した。

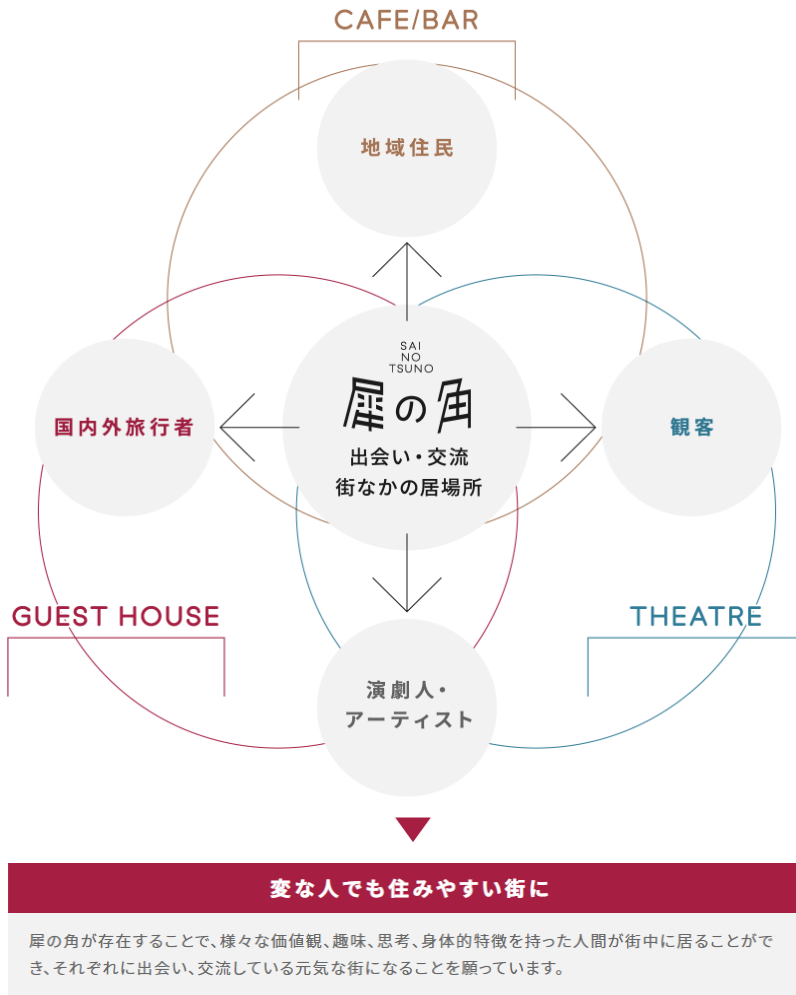
【インタビュー調査の発言から】

- コーディネーターという意識はあまりないが、犀の角がアーティストと地域の人と旅行する人が交流できるように設計したので、結果的にコーディネーター的な役割になってきたと認識している。（荒井）



本館 1 階の劇場・イベントスペース
撮影：太田拓実

◆ 出会い・交流の場としての「犀の角」



出典：「犀の角」HP (<http://sainotsuno.org/about/>)

(1) 犀の角の運営

犀の角の中核となる事業は演劇であり、劇場としての機能や役割が優先されている。その自由度を確保するために、宿泊とその他の事業を展開して、建物の家賃や施設の維持管理経費を賄うというしくみで運営されている。ただし、劇場といっても必ずしもブラックボックスのような本格的な劇場ではなく、ガラス張りで商店街に開かれた建物であることが、演劇の本質を見直したり、境界線を越えて地域との接点や市民との出会いを生み出したりすることにつながっている。

◆ 犀の角の施設構成

- 本館（劇場）
 - 1階：劇場・イベントスペース（120m²）、カフェ／バーカウンター
 - 2階：レンタルスペース01（約120m²）（楽屋／倉庫／小規模の作業場／アトリエなどとして）

のきした おふるまい 2(2021年)
(本館裏手の駐車場)
写真提供：犀の角



3階：レンタルスペース02（約120㎡、フローリング張り、西側一面鏡張り）（ダンス団体など各種芸術団体の練習場として）

● 別館（ゲストハウス、最大12名の宿泊が可能）

1階：シャワールーム／トイレ

2階：個室2室、男女兼用ドミトリールーム1室

3階：女性専用個室ツインルーム1室、女性専用ドミトリールーム1室、シャワールーム／トイレ

※3階は現在「やどかりハウス」（後述）として運営されている。

【インタビュー調査の発言から】

□ 劇場の自由を担保するためのビジネスモデル

- 収入は宿泊が6割、文化事業が3割、他が1割という感じで、文化事業は助成金と入場料収入で成立させているが、一番やりたいことは演劇なので、民間としてその自由を担保するために宿泊と飲食とをやっている。（荒井）
- かなり安価にしてもらっているが、家賃や固定費として月30万円程度を支払っている。定期的な支払いは楽ではないが、そのためにいろんな事業を行って、さまざまな人が入ってくることに繋がっている。（荒井）

□ 不完全さの持つポテンシャル

- 犀の角はブラックボックスのきちんとした劇場ではないために、逆に劇場とは何だろうか、ここで演劇は成立するだろうか、といった問いが生まれ、それが演劇や劇場の新しい可能性につながる。（荒井）
- ガラス張りや商店街に開かれた建物であることで、演劇自体を開いたり、劇場から飛び出して演劇を考えたりする。境界線を越えていくことで、地域の人々や演劇界とは違う人と接点を持つことができる。本格的な劇場ではないところからスタートしたから出会いが生まれやすくなった。（荒井）

(2) のきした おふるまい

新型コロナによって、犀の角の運営は大きなダメージを受けた。しかし、困っているのは犀の角だけではなく、地域には困難を抱えた人たちが大勢いて、そうした人たちを支援しようと始まったのが「のきした おふるまい」である。

「のきした」は、新型コロナの感染拡大をきっかけに、犀の角と交流のあった障がい者福祉団体や NPO、文化団体などが共同で立ち上げた市民グループである。コロナ禍という風雨をしのぐ「軒下」をつくって、困っている人が助かるための時間や場を提供しようという思いから名付けられた。

最初の「おふるまい」は 2020 年の大晦日から正月にかけて犀の角で開かれた。社会福祉協議会などから寄付された食料品や日用品が犀の角のステージに並べられ、支援を求める方々に提供されたほか、のきしたメンバーと来場者が一緒に火を囲んで豚汁を食べたり、ステージで歌ったりした。

おふるまいという名前も、従来の福祉的なイメージの強い「炊き出し」とは違う言葉を、という議論から生まれたものである。おふるまいは、その後も継続され、2022 年の 1 月には第 5 回目が開催されている。支援する側と支援される側を分けない、というのがのきしたの基本的な姿勢で、ふるまう側とふるまわれる側の垣根をなくし、皆で話をしながら一緒に食べ、互いに楽しみ、手伝い合うような催しとなっている。



ゲストハウス（別館）
撮影：太田拓実



やどかりハウス
写真提供：犀の角

◆ のきしたの主なメンバー・所属団体の活動

団体名（メンバー）	活動の概要
NPO 法人場作りネット （元島生）	3年前、東日本大震災を契機に（一社）社会的包摂サポートセンターが厚労省と復興庁の補助金を得て始めた「よりそいホットライン」の拠点を長野県に設置する話があり、富山県高岡市から上田に拠点を移して2019年3月にNPO化。 - 電話やLINEなど各種相談支援の窓口を運営し、年間8,000件もの相談に応じながら、相談者から寄せられる声をヒントに、地域社会の中に必要な場をつくっていくことを最大のミッションとしている。 - 犀の角と共同で、新型コロナで悩みを抱える女性専用の宿泊施設「やどかりハウス」をスタートさせた。元島さんは「やどかりハウス」のスタッフも務める。
上田映劇／NPO 法人アイダオ （直井恵）	「上田映劇」はもともと大正6年（1917年）に立てられた上田劇場で、昭和に入って映画上映が中心となって「上田映画劇場」と名称を変えた。2011年4月に定期上映を打ち切っていたが、創立100周年の17年4月に定期上映を再開、翌年NPO法人上田映劇が設立された。 「アイダオ」は社会と人とNPOのアイダ（間）をつなぐ中間支援のNPOで、上田映劇で「うえだこどもシネマクラブ」を運営している。「学校に行きづらい、行くのをやめてしまった子どもたちのための、もうひとつの居場所づくり」として、月1回（2021年度からは月2回）、平日の昼間に上田映劇のスタッフがセレクトした作品を上映、子どもたちだけでなく、保護者や先生も参加できる。 「うえだこどもシネマクラブ」はコロナ禍の2020年夏に立ち上げられ、引きこもりや不登校を経験した若者たちがコミュニティカフェを開き、上映の合間にはゲームやワークショップ、雑談をしながら過ごせる空間も用意されている。
NPO 法人リベルテ （武捨和貴、黒岩友香）	- リベルテは障がいのある人と一緒に活動する福祉事業所で、アトリエ活動を3ヶ所で展開するほか、相談支援という形で障がいのある方が社会資源として福祉サービスの活用も含め相談を通じて地域生活を行うためのケアプランを立てる仕事も行っている。 - 犀の角がカフェを営業していなかった日中の時間帯、リベルテが障がいのある人たちの運営するカフェ「リベルテの角」として1年半ほど運営していた時期があった。それが終了した後、同じく日中の時間帯で展開されているのが「犀の庭」である。 - 犀の庭はカフェスペースの日中の時間帯を「庭」に見立てて、誰もが気軽に集まれるサークル活動のような場づくりを想像して始めた。子ども連れの親子などが絵本を持ち寄って読み聞かせをしたり、「ポーセラーツ」というオリジナルの陶器づくりの体験教室や子どものニット帽づくりなどの活動が犀の庭で月1回開催している井戸端会議から始まった。コーヒーを片手に市政に関する雑談会「#上田と市政とコーヒーと」なども開催された。

出典：各団体のHP、SNS掲載情報等から作成

◎ やどかりハウス

「のきした おふるまい」の活動と並行して2021年2月にスタートしたのが女性専用の宿泊施設「やどかりハウス」である。

のきしたメンバーの元島さんが運営する「場づくりネット」では、新型コロナの発生以降、子育てや夫婦関係、親からの虐待などに悩む女性や女子生徒の相談が増えていた。コロナで女性の自殺が増加していたこともあって、悩みを抱えた女性が気軽に家を出て、再スタートできる駆け込み寺のような居場所をつくりたい、と元島さんが犀の角の荒井さんに相談して実現した。

新型コロナで利用者の減ったゲストハウスの女性専用ルームの一部を開放し、1泊500円、最大10泊でき

第0回うえだ街中演劇祭(2016年)
劇団百景社「走れメロス」
演出：志賀亮史
写真提供：犀の角



るというもので、支援の必要があれば専門機関につないでもらえる。10月から上田市の補助金も出るようになっていく。

【インタビュー調査の発言から】

□ 新型コロナがもたらした苦境と向き合う

- 犀の角にホームレスがふらっと入ってきてじっとしている。自分たちもたいへんだけど、社会全体がたいへんになっている。何とかしなければと思った。（荒井）
- のきしたのメンバーは、犀の角がオープンして以降つながっている人たちだったが、一緒に事業をする関係性はなかった。それが事業と一緒にやろうとなったきっかけはやはりコロナである。（荒井）
- コロナでこの活動が止まっていて、武捨さんの「犀の庭」など同時多発でいろいろな動きが起こっていた。一度、皆で集まって話をしようということになって、苦しい時をしのぐ「軒」をつくっていくということになぞらえて「のきした」をはじめた。（元島）
- のきしたの集まりで、回を重ねるごとに人が増えていった。（直井）

□ コロナで浮かび上がってきたこと

- コロナで今まで水面下にあったものが浮かび上がってきた。DVで悩んでやどかりハウスに滞在する人、ホームレスっぽい人、知的障がいのある女性など、困っている人たち、制度の狭間でこぼれ落ちてしまう人たちに、犀の角は、3時間、4時間じっと居てもらえるだけでもかまわない。（荒井）
- コロナになってゲストハウスの稼働が少なくなってきたタイミングで、困った人が泊まれる場所にしてやってみようというのが「やどかりハウス」のスタート。（元島）
- 生きづらさを抱えている人は思った以上にいるし、その人たちが立ち寄れる場所が犀の角だけではなく、世の中にもっとたくさんあったほうがいいと思う。のきしたでそれが広がりつつある。（荒井）

(3) 上田街中演劇祭

上田街中演劇祭は、「シアター&アーツうえだ」の主催で2016年に始まったものである。犀の角を中心にさまざまな場所で演劇公演やイベントが実施される。劇場に併設された稽古場やゲストハウスを活用して地域とアーティストとの交流を含めた滞在制作にも取り組んでいる。

2021年は9月17日から11月23日にかけて、犀の角や街中の施設を会場にさまざまな演劇公演が行われたほか、写真展、詩の朗読と音のライブ、トークセッション、映画の上映会などが開催された。演劇公演の中には、島崎藤村の長編小説「夜明け前」をモチーフに、犀の角が開設当時から連携している茨城県土浦市の劇団百景社と2年間をかけて創作している「Before the Dawn 夜明け前 第一部」も含まれている。

【インタビュー調査の発言から】

- 上田を拠点に3年ぐらい劇団の活動を続けていたら、犀の角が立ち上がるという話が出てきた。私自身が見ていた演劇という価値観から少し違った角度のお芝居や舞台などに合わせてもらえる。（伊藤）

(4) 行政との協働

上田市の文化行政や上田市交流文化芸術センター（サントミューゼ）と連携した取り組みも、荒井さんの重要な仕事に位置づけられている。具体的には、上田ロケ作品などの上映、映画関係者のゲストトークなどを行

い 2021 年で 25 回目となる「うえだ城下町映画祭」や、市内の文化財を活用し音楽や美術、パフォーマンス等の催事を行う「文化財 de 文化祭」への協力である。

また、公共劇場のサントミューゼとは、演劇のワークショップや街中での事業などで連携が行われている。

【インタビュー調査の発言から】

- 「文化財 de 文化祭」という文化財を活用した演劇、音楽活動を行っているが、会場となる文化財は市が提案し、文化財の活用方法や具体的な事業を荒井さんをお願いしている。（谷口）
- 街の中に芸術を展開していくことが、サントミューゼのミッションの一つだが、犀の角ができたことで予想よりずっと早くそれが具体化した。（掛川）
- サントミューゼと犀の角の最初の連携事業は、劇作家・演出家の多田淳之介さんに来てもらって、ワークショップでこの会場を使わせていただいたこと。（横尾）

2. コーディネーターとして活動するようになった経緯

(1) 演劇活動への取り組み

上田生まれの荒井さんは大学時代に演劇を始め、劇団を旗揚げした。卒業後もアルバイトをしながら演劇活動が続けるが、やがて行き詰まって郷里に戻り、民間企業に就職する。自分に向いていない仕事だったことから 3 年で辞め、上田市役所の臨時職員として美術展などの手伝いをする仕事をしている時、静岡県舞台芸術センター（SPAC）が制作スタッフを募集していることを知る。

上田市役所の仕事をしている間も「演劇とは何か」を自問し続けていた荒井さんは、応募して採用された。SPAC で働いて 10 年が経った頃、生活はギリギリでもいいから自分の演劇をつくってみよう決心し、郷里の上田に戻った。地方紙で記事を書く仕事を始めてしばらくした頃、元銀行の建物の再活用の話に巡り会って現在の犀の角の開設につながった。

【インタビュー調査の発言から】

- 大学時代に演劇を始めて、会社勤めをした時期もあるが、どうしても演劇を続けたいという気持ちがあったので、30歳を過ぎて「静岡県舞台芸術センター（SPAC）」で制作の仕事をするようになった。（荒井）

(2) 犀の角の立ち上げから現在まで

犀の角は、もともと上田商工信用組合という銀行の建物だった。2001 年に銀行が経営破綻して、現在のオーナーが買い取り、北欧の家具や雑貨などのお店がテナントとして入った時期もあったが、空き店舗となっていた。オーナーが建物の活用方法を公募し、市民ワークショップなどを経て計画案が示されていた頃、荒井さんがここなら劇場ができるのではと考えてまとめた事業計画書を提案し、オーナーもやってみようということを実現したのが犀の角である。

建物の改修費用はオーナーが負担し、荒井さんが別の法人「一般社団法人シアター&アーツうえだ」をつくって運営する形で 2016 年 9 月にオープンした。宿泊業と飲食業で経営を成立させて、助成金と入場料収入で文化事業を実施するという計画だった。

オープンから 3 年間、家賃を払いながら、ゲストハウス 6 割、劇場・文化事業 3 割、その他 1 割という売上げで、何とか運営していたが、劇場で演劇が行われ、ゲストハウスもあってカフェもやっている「犀の角」が

うえだ街中演劇祭 2018
「72 時間トーク」
写真提供：犀の角



どういう場所かがなかなか理解されず、運営を手伝ってほしいと思っていた若い人もなかなか集まらなかった。

その後、演劇だけではなく、シンポジウムや講演会、ライブなどさまざまな事業を行い、ゲストハウスを通じた出会いもあって、ここは面白い場所なんじゃないか、ということが次第に認識されるようになった頃に、新型コロナが発生し、ゲストハウスを収入源とする犀の角は大きなダメージを受けることになった。そうした状況の中から、前述の「のきした おふるまい」につながっていった。

【インタビュー調査の発言から】

- 自分でやるとは思わずに、ここのスペースであれば劇場ができるのではないかと提案をした。小劇場があると上田の街はもっと面白くなるという気持ちはあった。（荒井）
- 自分の中で演劇を（犀の角という）劇場として上演する、20年間継続するのだという気持ちになり、コーディネーターや劇場主という役割ができるかもしれないと思って始めた。（荒井）
- 最初、このスペースと一緒にやる人はいないか呼び掛けたが、何を言っているのだという感じ。「いや、分かるが、それは無理だろう」という反応が大半だった。（荒井）
- 最初は犀の角を立ち上げる意味が分からなかった。しかし、面白そうだと思って、できることがあればぜひ手伝わせてほしいと、運営スタッフの一員になった。（伊藤）
- 設計図をみて「やらない」という選択肢はないと感じた。演劇人として演劇に関わってきて、自分も表現したい人で、劇場ができるかもしれないときにやらなかったら多分一生やれないと思った。（荒井）
- 建物の改装費はオーナーが負担してくれたが、音響や照明、什器は自分で借入をして用意した。宿泊が6割、劇場が3割、その他で1割という収入計画を立てているうちにできるとしか思えなくなって、やらない方が損だと思うようになった。（荒井）
- ここが暖まるまで全速力で走り続けないと、場が冷えてしまう、という感覚があった。（荒井）

3. 犀の角を拠点としたコーディネート業務の特性と成果

(1) 演劇・劇場ならではの思いに支えられた確信

犀の角を拠点に活動する荒井さんの仕事として極めて重要なのは、何より演劇という表現活動が核になっていること、民間の劇場ならではのポテンシャルが発揮されていることであろう。

まず、荒井さんが重視しているのは、上田街中演劇祭などで、上田という地域に演劇文化を持ち込むことが、多様な価値観や新たな出会いを生み出すという考え方である。その根本には学生時代から演劇にこだわり続け、演劇を通して自分が思いもつかないような表現と出会い、演劇に救われたという経験のある荒井さん自身の確信に近い思いが存在している。

「変な人が住みやすい街に」という犀の角が掲げる目標は、生きにくさを抱えた人たち、支援の必要な人たちも含め、上田という街が誰をも受け入れられるような地域にしていきたい、ということにほかならない。荒井さんが演劇をとおして実現したいと考える地域社会の姿と、のきしたのメンバーがそれぞれの活動で目指していることがシンクロして生まれたのが、おふるまいという取り組みであろう。

【インタビュー調査の発言から】

□ 異なる価値観の共存する街

- SPAC やアヴィニヨンの演劇祭の良さはあらゆる価値観がフラットにあって、そこで出会いがあるということ。その状況を上田につくればもっと住みやすい街になるのではないか、と思った。（荒井）
- 街が、いわゆるモノカルチャー的な雰囲気からいろいろなものがあっていいという感じにはなった。街の雰囲気が変わった、と言ってくれる人もいる。（荒井）

□ 演劇からの救い、異質なものを許容する力

- 劇場で、自分が考えもしないことが表現されているものと身体をとおして出合ったときに、初めて救われるというか、自分と全然違うところでこのように生きている人がいるということを知って、初めて演劇が救いになった気がした。（荒井）
- 生きていく上で解決できない問題やどうしようもない問題があったときに、演劇に触れることで何とか生き延びてきた感覚があった。（荒井）
- 犀の角は、自分たちがより生きやすくなる状況をつくっていく試みでもあり、犀の角を立ち上げる時のプレゼンで「変な人が住みやすい街にしたい」と言っていた。演劇をしていると変なのは自分だけではないという感じがある。（荒井）

(2) 商店街に立地する民間劇場ならではの展開

犀の角が商店街に立地する民間の劇場であるということも、荒井さんの活動の広がりには不可欠な要素である。劇場という空間や創造の場に漂う雰囲気や空気感のようなものが、「のきしたの活動を生み出す大きな要因になった」「公民館や公共施設ではこうはならなかった」という意見は、のきしたの複数のメンバーから寄せられた。さらに、それが商店街の中に立地し、荒井さんが商店街の一員として活動していることが大きいという意見も、犀の角の特性を物語っている。

□ 民間劇場の有する空間や場のポテンシャル

- のきしたの活動は、公民館ではこうはならなかったと思う。ここが劇場だからということで、広がり方がすごく大きかった。演劇など表現する場にいると、何でもできるのではないかと思えてくる。（直井）
- 同じ劇場でもサントミューゼでは同じようなことはできないが、犀の角なら何かできる余地がありそうだ、ということを知り、感覚的にわかっている。（元島）
- 社会的なニーズを埋めていきたいという想いや、社会的な意味合いが強いことを身軽にできているのは、ここが民間の劇場という場であること、公共施設ではないこと、そして荒井さんの存在があると思う。（野川）
- 犀の角は公共劇場とは違った空間で、通りに面しているなどの制約もあるが、そのことがアーティストの挑戦を喚起し、ダンサーの鈴木ユキオさんは犀の角を飛び出してパフォーマンスをやった。（横尾）
- 荒井さんは「それは止めてほしい」ということを言わない。サントミューゼのピアノを犀の角に運び込んでピアニストの仲道郁代さんの演奏会を行うなど、普通ではできないようなことがいろいろ実現している。（掛川）

□ 商店街の一員としての活動

- 犀の角というこの場所がこの商店街にあるのがすごく大きい。日常とは遮断されている空間に身を置くのが劇場かもしれないが、ここは商店街の一角にあるので、すごく暮らしや街を行き交う人々に近い。（直井）

- 犀の角や荒井さんが商店街の一員として毎日のことをやってきたのが大きい。この辺りの人たちは通りがりに何をやっているか少しずつのぞきながら通る。それがお互い楽しい。ホールのような閉鎖的な空間だとそれはない。（掛川）
- 演劇公演の前後で商店街の向かいの中華料理店でご飯を食べたり、観客が花屋さんでお花を買ってここに持ってきたりなど、商店街の中で人々が循環し、商店街の方々との交流も生まれている。（荒井）

(2) 複合機能が生み出す予期せぬ出会い

犀の角は劇場以外にカフェや稽古場、ゲストハウスなどが複合した施設であり、それぞれの利用者が出会い、交流することから、新たな動きが生まれ、さまざまな成果に結びついている点も注目すべきであろう。

【インタビュー調査の発言から】

- 同じ場所で性格の異なる活動をすることで、演劇を見たい、アートに触れたい人たちと、地域の人たちや旅行者が偶然出会ったり、交流したりすることが発生している。（荒井）
- 商店街の人は最初は怪訝そうだったが、活動が続けるうちに、何かよく分からないが、犀の角で何かが起きているということが、理解されるようになったのではないかなと思う。（荒井）
- 犀の角で何かをやっていること自体が街に伝わることはすごくプラスになっている。何か頑張っている、楽しそうだと、街の人が面白がってくれている感じは実感としてある。ゲストハウスに泊まりに来た方に劇場の催しを案内すると、ご飯の後に立ち寄ってくれるなど、予期せぬ出会いが生まれる。（荒井）

(3) 街中への波及

上田街中演劇祭では、空き店舗や使われなくなった場所で演劇公演を行っている。その結果、演劇祭の終了後にカフェやデイサービスセンターが入居するなど、再利用されるケースが少なくない。しかし、空き店舗の有効活用や街中の活性化がこの演劇祭の本来の目的ではない。結果的にそうした街の活性化に結びつくことがあったとしても、多様な価値観が同時に存在している状態にしていくということが、荒井さんが演劇祭で目指していることである。

全国各地で地域活性化を目的に芸術祭やアートプロジェクトが開催されるケースは極めて多いが、本来の事業の目的と結果的に生じる波及効果を見極めることは、重要なポイントだと考えられる。

【インタビュー調査の発言から】

- はす向かいはずっと空き店舗で廃墟のような場所だったが、3年前の上田街中演劇祭のダンス公演で使わせてもらったところ、使えるという話になって、今は高齢者向けのデイサービスセンターが入居している。（荒井）
- 「うちは使えるか？」と声をかけてくれる人も出てきて、演劇公演で使った場所が、そのままどんどん次の人が入るという感じになっている。松尾町の倉庫でもやったが、そこも使わせてもらった後にカフェになった。元銭湯も劇場として使わせてもらった。（荒井）
- 自分としては空き店舗の有効活用や街中を活性化したいという意識はなく、いろいろな価値観や全然違う考え方が同時に存在している状態にしないと駄目だという思いがあって、そちらのほうが大きい。街中演劇祭をやったら、結果的に空き店舗の再生や商店街の活性化につながった、という感じ。（荒井）

(4) 文化行政、公共劇場との相乗効果

犀の角は民間の文化施設であるが、荒井さんはこれまでの経験やネットワークを活かして上田市の文化行政や公共劇場のサントミュージーゼと連携した事業を行うことも少なくない。行政職員からは文化財の活用方法について固定概念が変わってそれが係の中で共有されているという成果が報告された。また、サントミュージーゼの職員からは「犀の角の利用者や観客がサントミュージーゼとは異なることから地域の文化芸術の底上げや担い手の広がりが生まれる」「犀の角と連携することでサントミュージーゼの信用が高まる」といった意見が聞かれた。

【インタビュー調査の発言から】

□ 文化行政への波及

- 「文化財 de 文化祭」で別所神社の歌舞伎舞台で英国から来日したシェイクスピア・アンサンブルによる『マクベス』を実施した時、そこで繰り広げられた光景にカルチャーショックを受けた。文化財の新たな活用方法だけではなく、普段とは全然違う方々が別所神社に来てくれたことで、文化財への意識が変わる可能性を感じた。（谷口）
- その経験で視野が広がり係の中で共有されている。荒井さんの協力でいろいろな活用が可能だという判断材料が生まれ、文化財活用についての意識や固定概念が変わった。（谷口）

□ 公共劇場との相乗効果

- サントミュージーゼに来る方と犀の角に来る方は若干違う。上田にこのような人材がいたのかと気づかされる。（横尾）
- サントミュージーゼは、行政がやっているからという理由で近づかない方々もいるが、犀の角でサントミュージーゼの関連事業をやると、サントミュージーゼへの信用が高まる。それはすごく大きい。（掛川）
- 劇場と地域の拠点があることが、地域の芸術文化の底上げや、普段着で行ける場所が増える実感につながっている。サントミュージーゼだけだったら広がりが出ていなかった。（横尾）
- サントミュージーゼに来ない市民の意見を聞くのは難しいが、荒井さんからは、上田商店街を含めた地域の方々の思いや要望を結構ダイレクトに聞くことができ、私の中では宝になっている。（横尾）

4. 問題点・課題

現在、犀の角にとって、活動や施設の運営を継続させることが大きな課題となっている。とりわけ、新型コロナウイルスの影響で、ゲストハウスの利用者が減少したり、カフェなどの売上げが落ち込んだことが、深刻な状況をもたらしている。そうした状況下でも、上田街中演劇祭を継続させ、のきしたのメンバーとともに、支援の必要な人たちへの「おふるまい」を継続している荒井さんの姿勢や取り組みは、敬意を持って受け止めるべきであろう。

さらに、国や地方公共団体などの公的な支援に対して、荒井さんは極めて重要な問題点や矛盾を指摘している。自分たちの活動のために、公的な補助金や助成金を得ると、国や地方公共団体の意図や目的に沿ったものにならなければならなくなり、結果的に本来の目的や事業のあり方を見失う恐れがあるということは、コーディネーターの活動に限らず、公立の文化施設や民間の文化団体にとっても留意すべき点だと考えられる。

一坪半劇場
写真提供：犀の角



【インタビュー調査の発言から】

□ 犀の角を継続すること

- 街の中の劇場や居場所をどう継続するかが一番大きな問題。公的資金に頼ると制約が出てくる。コロナになって当初計画していたように宿泊と飲食で経営を支えることが難しくなっている。（荒井）

□ 公的な補助金や助成金がもたらす矛盾

- 芸術はフラットというか、誰にとってもどのような立場であっても平等にその人が受け取りたいように受け取ればいいものだと思う。しかし公共や国のお金が入るともっとサービスしなければいけないなど、違う力学が働く気がして、公共のサービスとはどのようなものなのかを考えないといけない。（荒井）
- 補助金や助成金の比率が大きくなると自分たちの思いとは別の、国や地方公共団体の意図や目的をインストールしなければいけなくなる。でも、僕は公共の人間ではないので、完全にそうする必要はないはずだが、いつの間にか国や公共団体の意図や目的が、元々あったかのように思ってしまうところもある。すると自分は何だったかと分からなくなってしまう、そのジレンマはすごく大きい。（荒井）

5. コーディネーター推進の方向性

(1) 演劇や表現活動をとおして生きにくさと向き合う

生きづらさを抱えた人たちが悩んでいることと、演劇や表現活動における葛藤には共通するものがある、という荒井さんの指摘は、犀の角やのきしたが地域や市民と向き合う際の基本的な考え方や姿勢を示している。

インタビューでは、アートと障がい者福祉に親和性がある、評価に左右されない子どもたちの自由な表現にとって映画や演劇などが重要である、という指摘もあったが、そうした視点からアートや表現活動の価値を捉え直すことが重要だと考えられる。

【インタビュー調査の発言から】

□ 表現活動と生きにくさに共通するベクトル

- 生きづらさを抱えている人が何とかならないかと思っていることと、表現者が何か新しい表現ができないかと思って葛藤していることは、実は同じベクトルではないかと思う。実際、やどかりハウスに泊まった子が、別役実の戯曲を読むワークショップを受けて、別役さんの言葉に感動している。（荒井）
- コロナで劇場でイベントができなかった時に最初に犀の角に来たのはアーティストだった。ギターを持って「ここで歌わせてもらってもいいか」とやってきて、営業はしていなかったが窓から商店街を通る人に見てもらった。2020年の4月ぐらいから「一坪半劇場」と名付けてやっているが、やはり、最初に何かを始めるのはアーティストのような敏感な人たちだ。（荒井）

□ アートと福祉の親和性

- 若い人が就職できないから死ぬしかないと思うなど、社会の中に自分が生きる隙間を感じられない人が増えている。でも、オープンマイクで自分なりの表現をすると、自分の内側を表現する場所が生まれて、まだ生きていけるかもしれないと思える機会になる。そういう点では、アートと福祉はすごく親和性が高い。（元島）
- アートという先入観ではなく、取りあえずトライしてみよう、話し掛けてみようといった積み重ねを楽しんでいて、犀の角という空間にいる人たちがつくっている空気や視点がすごくフラット。そこには、自分たち

が普段の活動で悩んでいる「障がい」がある人への支援が前提になってしまう関係を変えていくようなヒントがある。（武捨）

☐ 評価から離れた子どもたちの自由な表現

- 映画の見方には正解がない。自分が感じたものがすべてで、他者から評価されないところが大事。その考え方で「うえだこどもシネマクラブ」は運営している。今の子どもたちは作文でも人に評価されることを意識して、自由に表現することがなさ過ぎる。映画や演劇は子どもたちにそうした自由な表現の機会を与えてくれる。（直井）

(2) 共に悩み、次のアクションにつなげる

のきしたのメンバーから聞かれた「皆で考えて共有する」「支援する側とされる側の区別がない」「余白や隙間が大切」「決まり事のないところから何かが生まれる」といった意見は、コーディネーターの活動を考えるうえで、いずれも重要なポイントだと考えられる。

また、文化芸術と地域や市民をつなぐのがコーディネーターの役割だと言われるが、ただつなぐのではなく、その先に何が起るかを見据えること、次の具体的なアクションにつながるようなつなぎ方をすることも、心がけておきたい。

【インタビュー調査の発言から】

☐ コロナから始まったことを共有、協働していくこと

- コロナを機に始まった具体的な取り組みは、自分たちだけが背負うことではないと思う。劇場から始まったことだが、地域で、皆で考えて、共有して、お互いできないところを支え合っていけばもっと社会は生きやすくなる。（荒井）

☐ 支援する側とされる側の区別がない

- 生きにくさを抱えた人たちは支援の対象と言われるかもしれないが、支援する側とされる側という境目はない気がする。のきしたのメンバーも皆が皆悩んでいて、何をするのが一番いいのだろうと一緒に考えた時に、劇場だから今までの制度では表現できなかったことができたという面がある。（直井）
- 支援する側、される側という関係性をどう壊すかが僕らのテーマ。街でホームレスとして出会うその人と、ここで一緒にご飯を食べて出会うその人では別人である。それを「出会い直し」と呼んでいる。福祉の窓口では出会い直しが難しいが、犀の角には出会い直しの機会がたくさんある感じがする。（元島）
- 荒井さんは障がいのある人をあまり障がいのある人として見ていない。福祉施設をやっていると、支援する、されるという「支援」が前提となり関係ができてしまうが、（福祉施設職員は）それを越えていこう、変えていこうとする人は少ない。（武捨）

☐ 余白や隙間、決まり事がないところから生まれるもの

- 双方向というか、何か余白があって、そこに皆で一緒に描いていく、一緒につくり上げていく、一緒に立ち上げていくという空気がすごくあって、何か広がっていきそうだという感じはある。（清水）
- 犀の角は、家がない人たちや街でうろうろしている少し障がいがある人など、いろいろな人が自然と集まる場所でもあって、それはやはり隙間があるからだと思う。（元島）
- 犀の角は決まり事がなく、オープンマイクで誰かが歌い出したり、トークイベントで何が話されるか、しゃべ

上田街中演劇祭 2020
山田せつ子
『そして なるほど ここにいる』
撮影：安徳希仁



る人もよく分かっていないこともあるが、そこで生まれるものをすごく大事にしている。（元島）

□ 人をつなげることで物事が具体的に動いていく

- のきしたで、誰かが何かをやってみたいと言うと、「では、あの人がいい」と皆が知り合いをどんどん連れてきて、具体的に物事が進んでいく。いろいろな角度で人と人をつなげてパイプになってくれる存在が「のきした」には無数にいる。（伊藤）
- 自分がつながりたいからつなげようと思っているわけではなく、思い付いてパッと動いているという感じ。皆コーディネーターという意識はなく、それぞれのことをリスペクトしているので、こういった謎の共同体ができている感じがする。（伊藤）
- つなぐためにつなげているわけではなく、必要なことがあってこうなったらいいのではというアクションに向けてつなげている。コーディネーターには、創造性などがなくと有機的につながっていかないのではないかな。ただくっつけているわけではなく、そこに先があるからくっつけられる。（荒井）

(3) 地域社会が支える共有地としての民間劇場

荒井さんは、1対多ではなく地域の一人ひとりとつながることの重要性、集まって表現できる劇場のような場所の必要性を指摘する。そのうえで、犀の角のような民間の劇場を、現在の経済システムの中で個人の力で支えるのではなく、神社のように地域社会全体で支える共有地のような形で運営できるようにしていきたいと抱負を述べている。

近年の文化政策や文化行政において、文化芸術や劇場やホールなどの文化施設は、公共財産として国や地方公共団体の公的資金によって支えられるべきだと考えられてきた。そのために文化芸術や文化施設は、なぜ地域に必要か、そのことでどんな成果や効果が生まれるか、といったことが政策評価や事業評価として厳しく問われるようになっていく。

それに対し、犀の角やのきしたの活動は、民間の立場から、問題意識を持った市民一人ひとりの知恵や取り組みをとおして、文化芸術からよりよい地域社会を生み出していこうとするチャレンジであり、これからの文化政策や地域政策にとって大きな示唆を秘めているといえよう。

【インタビュー調査の発言から】

□ 1対多ではなく、地域の一人ひとりとつながること

- 街の中で、地域の一人ひとりとつながっていくことが、大きかった。1対多ではなく、1対1で関係性をつくって初めて劇場に来てくれる感覚があった。それは今やっていることでも変わらない。（荒井）

□ 集まる場、表現する場の必要性

- 今のコロナ禍で、街で生きる人にとっては、集まって話すことも必要。その意味で具体的に人が集まって、かつ、表現することができる劇場のような場所が必要だということを、痛感している。（荒井）

□ 民間劇場を共有地として支える仕組み

- 民間主導の方が街との信頼関係・関係性を蓄積しやすい。民間と協働していくことで民間に経験もノウハウも残っていくと役所的にはプラスになる。（清水）
- もっと違う場の在り方があるのではないかと考えている。誰か一人が負担して犀の角のような場所を維持するのではなく、皆の共有地的な発想で、皆で守っていく場所にしていくべきではないか。（荒井）

-
- ただ、そういう場所の必要性は誰かが言語にして実践で示さないと理解されない。この5年間でそれがある程度示せたと思う。それをいかに共有して、個人の負担ではなく、社会全体に広げて、多くの人と共有していけるかが課題だ。（荒井）
 - 数年先には、神社のように地域の人が必要なものだと思って皆で掃除したり、管理したり、お金を出し合って直したりするという感覚で劇場を地域社会が支えていく仕組みに変えていきたい。資本主義の経済のサイクルだけではないところで、劇場なり、場所というものが回るトライをしたい。（荒井）
 - 神社にある歌舞伎舞台や神楽殿は元々が皆の共有財産で、皆が大切にしているが、管理している人は高齢化している。そこを僕らのような人間やもっと若い人たちが維持する代わりに、現代劇やダンスなどの公演を行うのはどうかと考えている。（荒井）